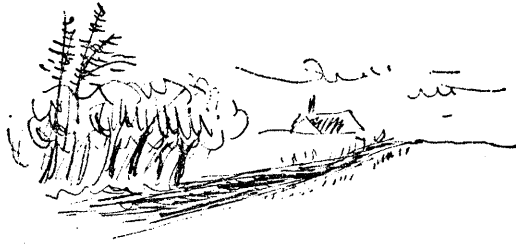


私の保育



佐々木和子

一日と緑色にうめられていく田んぼを見ながら……、澄んだ青空にいきおいよくおよぎまわる園庭の鯉のぼりをみながら……、はて、みちのくの片田舎での子どもたちとの触れあいをあらためて活字に表わすとなれば、何をどう具体的に表現すれば良いだろうと、とまどいを感じる。

四季折々にかわる山河、夜ともなれば子守り歌のような波の音。恵まれた自然の中で生まれ育った本園の子どもたち、この恩恵をごくあたりまえと今は育っているが、やがて成長し町を巣立って遠くからふりかえってみたとき、ふるさととの緑の山々、小川のせせらぎ、小鳥のさえずりの美しさに、幼き時代の思い出をなつかしがり、また大切にしようという気持ちになるのではないかと期待する。

○

春と子どもたち

集団になれてほっとした頃に気づいて親しみをもつのが、観察池のメダカ、コイ、フナ、ドジョウ、オタマジャクシ……年長児ともなればそれだけではあきたらず、登園の際（本園では各地区の小学校登校班に編入して、年長に

なれば徒歩通園をしている。目についた小川のガラス貝、フナ、ドジョウを、降園時にズボンや園服のよごれなんか気にとめず泥だらけになって、はては園帽に獲物を入れて家へのみやげとする。顔、身体中泥にまみれたくましく、あさましいありさまである。こうしてすごしているうちに、園庭の二本の柿の木に白い花がつきはじめ、それがやがて子どもたちの唯一の遊び相手になる。落ちた花をひろって首飾りやかんむりを作って女王気分にはたたり、ままごとの材料にしたり、十本の指に花をさし「怪じゅうだぞー」と女兒をおいかけまわる男児。小さな柿の花が大きき遊び相手にかわり、不思議である。この遊びは誰がはじめるともなく、年長から年少へと遊び伝えられてほほえましい。やがて水がこいしく水遊びが盛んな季節になってしまう。

夏と子どもたち

「トントントントン」リズムカルな音が聞こえてくる。雑草園や園庭の土手のあちこちのヨモギを摘んできては石でつぶして、水を加えて色水遊びに熱中している。ツユ草、

スイバといろいろの雑草をためしてはジュース作りがはじめられる。小川のそばではアシの葉、ササの葉でアシ舟、ササ舟を作っては流し、作っては流して楽しむ遊びが展開される。年長ともなれば、作り方によって流れが速いかおそいかと何度もためして、工夫して友たちと競争している。夏休みがすぎ九月も半ばになると、緑の田んぼが一面に黄金色にかわる。園舎の裏の松林も少しずつ色づき、子どもたちの活動の場とかわる。

秋と子どもたち

絵本袋に松ボックリ五個ひろって数あそびをするつもりで、散歩がてら裏山に出かけると「先生キノコがあるよ」とはやくも秋の香りがただようハツタケなどが顔を出している。松ボックリひろいは、いつのまにかキノコ取りにかわる。

保育室にかえって松ボックリを並べて遊ぼうとすると、「先生ちょっと待ってて、ボクの一個足りないからすぐひろってくるね」とあわててかけ出して行き、不足の松ボックリをひろってくる。なんともほほえましい光景である。

春に白い花をつけた柿の木もすっかり色づき、収穫の時期になる。毎年自分で食べる分の二個は、自分の手で収穫することになっている。秋晴れの一日、十日後に食べられる楽しみを待ちながら、一斉に柿の収穫にあたる。手の届かない年少児には、木のぼり名人の年長男児が張切って実をとってあげたり、待ちきれずに一口ガブリと柿にかじりつき、思わず顔をしかめたりにぎやかな収穫祭である。畑のさつまいももほどよい大きさに突り、収穫を待っている。一本のつるに一名のかわいい手が伸びて収穫にあたる。この時も子どもたちは自分の掘ったさつまいもを自分で食べるのかと、内心ドキドキしながら土の中に手を入れる。小さきままな顔がのぞき歓声をあげたり、しょげたり、表情がかわいい。「太い、細い」、「短い、長い」、「重い、かるい」などさつまいもを活用しての遊びがしばらく続けられる。おやつに二度ほど食べられる。

東北の秋は短い。どうこうしているうちに日没がはやくなり、あちらこちらで冬仕度の準備が見られるころ、子どもたちの様子にもこれからやってくる冬の厳しさに対する身がまえがあらわれてくる。長い冬である。

冬と子どもたち

小学校の六年生に手をひかれ、大人すらおっくうな朝でも、防寒具に身を固め、ほっぺをまっかにして登園してくる姿には、おもわず涙が出るほどである。

秋にいろいろ活動した裏山は、冬にはゲレンデとはやがわりし、子どもたちは登園後休むまもなくそりを持って、いそいそと出かける。松の木立の間をぶつかりもせずまくぬってそりすべりを楽しむ。全員が使えるそりがなくて順番のくるのが待ちきれず、登園の際にはいてくるカッパズボン（ビニール製やゴム製のもので、防寒に役立つので徒歩通園の子どもたちは全員着用してくる）を持ち出し、そりがわりにしてすべりはじめる。そのインスタントそりがかえって長い距離をすべれるらしく、そりのうはいいはなくなる。遊んでいる途中のどがかわけば、上側の雪をよせて下の雪をほおばり水分を補給する……全く野性的といおうか、野蛮といおうか、苦笑せざるをえない。

雪国の子どもたちは猛吹雪でない限り、毎日園庭に飛び出し雪あそびを楽しむ。

教師がふみだわら（わらでつくった雪ふみ用のくつ）で雪の上に道をつけ、迷い道ごっこをしたり、それが発展し現代っ子は「基地作り」などと新しい遊びを創造する。基地にいろいろなものを作り集めることから「協力」「完成させる喜び」「くずれて残念だ、やり直そう」など体験から学ぶ。

保育室のテラスにさがった大小様々なツララに日がさし、軒下にポットン、ポットンと少しずつが落ちはじめると、そろそろ長い冬から解放され、春の気配を感じるようになる。

○

東北の人々の表情は固く、暗いとよく言われる。一年の三分の一を雪に閉ざされ、気持ちが減入り、おのずとそんな表情になるのだろうか。しかし、無邪気な子どもたちは、そこぬけに明るい。大自然を遊び相手に、のびのび行動しているからだろうか。

秋田といえども年々都市化の傾向がみえはじめ、私たち自然を愛する者を落胆させている。農業県である秋田の将来をなう子どもたちに、土を愛すること、自然を愛する

ことの大切さ、喜びを味わうことのできる大人になってもらいたいと願いつつ、保育の道を歩んでいる。本園を取りまく自然環境は、都市部の園からうらやましがられている程恵まれている。この環境を大切にし、うまく生かして利用し、活動することを特色とし、それを誇りにしている。朝四キロ、降園時四キロの道のりを、のんびりのんびり、時々脱線しながら通園する本園の子どもたち、決して知的ではないがたくましいと自慢できる。

田舎の幼稚園の子どもたちの一片をご理解いただけたら幸いである。

（秋田・西目町立西目幼稚園）

